

子どもの遊びと仲間集団に関する研究

—— リーダーシップを中心に ——

堺 賢治・宇野 さおり*

(保健体育研究室)

(平成8年4月30日受理)

A Study of Child Play and Peer Group : Focusing on Leadership

Kenji SAKAI and Saori UNO

I. 序 論

最近の大学運動部において指摘されていることは、キャプテンやマネージャーのリーダーシップ能力が低下していることである。この現象は運動部に限らず、一般の大学生においても現れており、若者共通の特徴になっている。また、体育の授業でも以前に比べてリーダーに進んでなる人が少なくなり、グループ学習が難しくなりつつあるといわれている。

このような現象が出現した背景として、大人になるプロセスの中で人に使われた経験や人を使った経験があまりないことがあげられ、子ども時代の経験が大きな影響を及ぼしているものと思われる。子ども時代の様々な経験の積み重ねが大人になってのリーダーシップの発揮につながるといえよう。そしてこのような経験は遊びを通して体験されてきた。しかしながら、戦後の高度経済成長以降、子どもの遊びは非常に変容した。中でも、子どもの遊びの三つの間、時間・空間・仲間の変化は著しく、特に仲間集団の一つである遊び集団は大きく変わったといえる。遊び集団は異年齢集団から同年齢集団へと変化し、その形態も多人数で遊ぶ活動集団から少人数の気の合う人だけで遊ぶ交友集団に変わり¹⁾、子どもたちを社会化する機能をもつ多人数で遊ぶ規則をもったゲーム遊び²⁾も少なくなってきた。このような状況のもとで、タテ関係の遊び集団を通して獲得されてきた子どものリーダーシップ能力は低下してきたものと思われる。それに変わって出現してきたのがスポーツ少年団に代表される大人の手によるスポーツ集団である。たしかにこのようなスポーツ集団は運動をする機会を与えるが、遊びを通して学習される「自発性」「自主性」³⁾はそれほど身に付くとは思われない。このことが現代青年のリー

*松柏小学校

リーダーシップ能力の不足をもたらした一つの原因ではなかろうかと推察される。

そこで、本研究はリーダーシップ研究の糸口として、子どものリーダーシップに視点をあわせ、子どもの遊びと仲間集団との関連を探求することを目的にした。

II. 方 法

調査対象：愛媛県松山市の小学校の5・6年生 910名

調査時期：1994年12月

調査方法：質問紙による配票調査

回収率：有効回収数 891名 有効回収率 97.9%

分析の視点

リーダーシップには目標達成機能（Performance 以下P機能という）と集団維持機能（Maintenance 以下M機能という）がある。⁴⁾ 本稿においては、子どもたちの生活場面に焦点を合わせ、次のような調査内容を作成した。なお各場面において1番目に書いてあるものはP機能に関する質問、2番目に書いてあるものはM機能に関する質問である。

〔学級会の場面〕

- ①学級会の時に、自分の意見を積極的に発言するほうである。
- ②学級会の時に、みんなの意見がたくさん出た後、その意見をまとめようとするほうである。

〔先生に怒られたとき〕

- ③みんなが先生に怒られたとき、どのようにしてあやまるかみんなに言うほうである。
- ④みんなが先生に怒られたとき、冗談を言ってクラスを明るくするほうである。

〔遊びの場面〕

- ⑤あなたは、遊びに行くときに友達をたくさん誘うほうである。
- ⑥あなたは、だれとでも仲良く遊ぶことができるほうである。

〔遊びの方法〕

- ⑦遊びのルールを自分が進んで決めるほうである。
- ⑧遊び方を決めるときに、反対している人をなんとかして説得するほうである。

〔友達関係〕

- ⑨友達がけんかをしているときに、すぐに止めに入るほうである。
- ⑩友達関係や自分と友達の仲が良くなるように、いつも気を使っているほうである。

これらの質問に関しては、すべて5段階にランク付けされた回答(そのとおりである…5点, まあそのとおりである…4点, どちらともいえない…3点, あまりそうではない…2点, ほとんどそうではない…1点)を用意した。

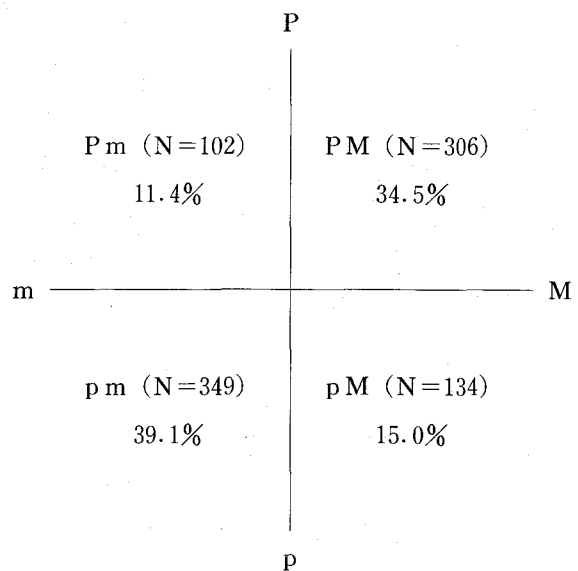


図1 PM機能

そして、P機能に関する質問の回答を合計したものと、M機能に関する質問の回答を合計したもののから次の4つに分類した。(図1)

- P機能15点以上・M機能15点以上…PM群
- P機能14点以下・M機能15点以上…pM群
- P機能15点以上・M機能14点以下…Pm群
- P機能14点以下・M機能14点以下…pm群

Ⅲ. 結果及び考察

1. 性別

表1は性別についてあらわしたものである。全体をみると、男女はほぼ半数ずつであり、差はみられない。各群を比較すると、PM群は男子61.4%、女子38.6%と男子に多く、一方pM群、Pm群、pm群は女子に多く、男子のほうが女子よりもリーダーシップを取っているといえる。

表1 性別 (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
男	61.4	44.7	48.0	41.3	49.5
女	38.6	54.3	52.0	58.7	50.4

P < 0.001 (χ^2 検定, 以下同じ)

2. 遊びの現状

(1) 遊び時間

表2は平日の遊び時間をあらわしたものである。全体をみると、「1～2時間」が33.8%と最も多く、「2～3時間」の23.9%、「30分～1時間」の17.4%と続いている。14年前の調査⁵⁾では「1～2時間」が40.2%と最も多く、「2～3時間」の28.5%、「30分～1時間」の

表2 遊び時間(平日) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0分	11.1	11.9	15.7	12.3	12.2
1時間未満	16.7	14.9	20.6	18.1	17.4
1～2時間	36.6	38.1	24.5	32.4	33.8
2～3時間	22.2	24.6	24.5	24.9	23.9
3～5時間	10.5	8.2	12.7	10.3	10.3
5～7時間	2.9	2.3	2.0	1.4	2.1
7時間以上	0.0	0.0	0.0	0.6	0.3

N. S.

表3 遊び時間(休日) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0分	1.4	0.7	2.0	2.5	1.8
1時間未満	1.6	0.7	1.0	1.7	1.5
1～2時間	5.9	5.2	2.9	4.6	4.9
2～3時間	7.5	3.8	7.8	9.2	7.6
3～5時間	29.7	38.1	27.5	32.4	31.8
5～7時間	29.1	26.1	36.3	28.4	29.2
7時間以上	24.8	25.4	22.5	21.2	23.2

N. S.

12.7%と続いている。ほとんど遊んでいない子どもについては、14年前の4.1%に比べて12.2%と遊んでいない子どもが増えている。

表3は休日の遊び時間を示したものである。全体では、「3～5時間」が31.8%、「5～7時間」が29.2%、「7時間以上」が23.2%と続き、平日に比べよく遊んでいるといえる。各群を比較すると、平日、休日とも差はみられない。

(2) 遊びの場所

表4は平日の遊び場所をあらわしたものである。全体をみると、「自分の家の中」や「友達の家の中」などの「中遊び」をしている子どもは、47.7%にものぼり、「家の庭」や「家のそば」などの「家の周辺」と答えた子どもは23.3%であり、「公園」「運動場」「空き地・原っぱ」などの「外遊び」は16.9%と少ない。14年前の調査⁵⁾と比べると、「中遊び」32.5%、「外遊び」30.2%となっており、「外遊び」が減少していることがわかる。この理由としては「空き地・原っぱ」などがなくなったことや、今の子どもたちがよくしている遊びであるファミコンの普及が「外遊び」の機会を少なくしてしまったのではないかと思われる。各群を比較すると、PM群は「中遊び」が42.2%と最も多く、ついで「外遊び」の24.8%、「家の周辺」の21.2%となっている。それに対してpm群では、「中遊び」が51.5%と最も多く、ついで「家の周辺」の25.0%、「外遊び」の11.8%と続いており、前者の方がよく外遊びをしているといえる。

表4 遊び場所 (平日) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
公園	14.4	7.6	7.8	6.6	9.5
運動場	6.2	5.3	4.9	2.9	4.6
空き地, 原っぱ	4.2	0.8	3.0	2.3	2.8
家のそば	17.3	22.5	16.7	22.1	19.9
家の庭	3.9	2.3	4.9	2.9	3.4
友達の家の中	15.7	16.5	13.7	18.1	16.5
自分の家の中	26.4	34.4	33.3	33.4	31.2
その他	5.9	3.8	5.9	2.8	4.5
無回答	5.9	6.8	9.8	8.9	7.6

N. S.

表5 遊び場所 (休日) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
公園	14.4	16.5	7.8	14.3	13.9
運動場	8.2	2.3	6.9	4.0	5.5
空き地, 原っぱ	9.5	6.1	3.9	4.3	6.3
家のそば	10.5	11.3	15.7	14.0	12.6
家の庭	4.2	3.8	3.9	1.5	3.1
友達の家の中	22.2	26.9	14.5	24.1	23.9
自分の家の中	12.4	16.5	17.6	22.1	17.4
その他	17.3	15.0	18.6	12.0	15.0
無回答	1.3	1.6	1.1	3.7	2.3

P < 0.05

表5は休日の遊び場所を示したものである。全体では、「中遊び」41.3%、「外遊び」25.7%、「家の周辺」15.6%と外遊びは10%ぐらい増えているが、休日にも関わらず「中遊び」を行っている子どもが多いことがわかる。各群を比較すると、PM群では「中遊び」が34.6%と最も多く、「外遊び」の32.1%、「家の周辺」の14.7%と続いている。pM群、Pm群になるにつれ

て、「中遊び」の割合が増え、「外遊び」の割合は減っていく。p m群では、「中遊び」は46.2%、「外遊び」は22.6%、「家の周辺」は15.4%となっており、PM群に比べ、1割以上も「中遊び」の割合が高い。

これらのことから、リーダーシップ能力の高い子どもの方が低い子どもよりも外で遊んでいる傾向がみられる。

(3) 遊びの人数

表6は遊びの人数をあらわしたものである。全体をみると、「3～4人」で遊んでいる子どもが57.0%と最も多く、「5～9人」の18.6%、「2人」の16.2%と続いている。14年前の調査⁵⁾では、「3～4人」が50.1%と最も多く、ついで「2人」の26.0%と続いており、少しではあるが遊びの人数は増えている。しかしながら、少人数で遊んでいる傾向は変わっていない。各群を比較すると、PM群では5人以上で遊んでいる子どもが29.4%いるのに対して、pM群は23.9%、P m群は20.5%、p m群は12.6%になっており、リーダーシップ能力の高い子どもほど多人数で遊んでいるといえる。

表6 遊び人数 (%)

項 目	PM	pM	P m	p m	全 体
0人	2.3	3.0	3.0	1.7	2.2
1人	1.6	3.0	3.9	5.4	3.6
2人	9.2	17.9	14.7	22.1	16.2
3～4人	57.5	52.2	57.8	58.2	57.0
5～9人	26.8	20.9	17.6	10.9	18.6
10人以上	2.6	3.0	3.0	1.7	2.4

P<0.001

3. スポーツ・文化活動

(1) 参加の有無

表7はスポーツ・文化活動への参加の有無をあらわしたものである。全体をみると、「入っている」と答えた子どもは63.0%であり、スポーツ・文化活動を行っている子どもが多いといえる。14年前の調査⁵⁾では、文化活動は調査の対象になっていないとはいえ、スポーツ活動をしている子どもが2割程度しかいなかったことを考えると、子どものスポーツ人口が増えたことが遊びの衰退の原因をつくっているのではあるまいか。各群を比較すると、スポーツ・文化活動を行っているという子どもは、PM群は76.1%、pM群は57.8%、P m群は57.8%、p m群は52.1%となり、リーダーシップ能力の高い子どものほうが、スポーツ・文化活動をよく行っている。

表7 スポーツ、文化活動の参加の有無 (%)

項 目	PM	pM	P m	p m	全 体
入っている	76.1	64.9	57.8	52.1	63.0
入っていない	23.9	35.1	42.2	47.9	37.0

P<0.001

(2) 責任者経験

表8はスポーツ・文化活動の責任者経験をあらわしたものである。全体では、「キャプテン」や「副キャプテン」の経験のある子は16.9%とそれほど多くないといえる。各群を比較すると、

責任者を経験したことがある子どもは、PM群は25.8%、pM群は11.5%、Pm群は17.0%、pm群は8.2%と、P機能の高い子どものほうが責任者になっている傾向がみられる。

表8 スポーツ、文化活動の責任者経験 (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
キャプテン、副キャプテン経験有り	1.7	1.2	0.0	1.1	1.2
キャプテン経験有り	11.2	3.4	8.5	2.7	7.0
副キャプテン経験有り	12.9	6.9	8.5	4.7	8.7
キャプテン、副キャプテン経験なし	69.5	82.8	83.0	84.1	77.8
無回答	4.7	5.7	0.0	7.7	5.3

P<0.001

(3) 友達の責任者経験

表9は自分の友達がスポーツ・文化活動の責任者の経験があるかをたずねたものである。全体をみると、「責任者経験がある」というのは、40.7%であり、約4割の子どもに友達が責任者の経験があるといえる。各群を比較すると、「責任者経験がある」というのはPM群では52.0%と5割をこえており、pM群は46.3%、Pm群は34.3%、pm群は30.7%であり、M機能の高い子どもの方に責任者経験のある者が多い。つまり、リーダーシップ能力の高い子どもはリーダーシップ能力の高い子どもと接し、仲間として集団を形成しているものと思われ、一方、リーダーシップ能力の低い子どもは、リーダーシップ能力の低い子どもと付き合っていることになり、仲間集団の縮小化と同質化が進んでいるものと思われる。

表9 友達の責任者経験 (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
経験有り	52.0	46.3	34.3	30.7	40.7
経験なし	44.4	47.4	61.8	67.0	55.8
無回答	3.6	6.0	3.9	2.9	3.1

P<0.001

(4) 体育の好き嫌い

表10は体育の好き嫌いを示したものである。全体をみると、「好きなほうだ」と「どちらかといえば好きなほうだ」をあわせると63.1%の子どもが体育が好きである。各群を比較すると、「好きなほうだ」と答えた子どもは、PM群では61.6%、pm群では35.0%とリーダーシップ能力の高い子どものほうが体育が好きであるといえる。この理由としては、PM群の子どもはスポーツ・文化活動を積極的に行っており、スポーツの得意な子どもたちが多くからだといえる。

表10 体育の好き嫌い (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
好きなほうだ	61.6	43.3	54.9	35.0	47.6
どちらかといえば好きなほうだ	13.4	16.4	11.8	18.1	15.5
普通である	15.4	29.1	22.5	36.6	26.6
どちらかといえば嫌いなほうだ	4.2	4.5	5.9	6.0	5.2
嫌いなほうだ	2.9	3.7	3.9	2.9	3.1
無回答	2.7	3.0	1.0	1.4	2.0

P<0.001

4. 仲間集団

(1) 学校の友達

表11は、学校の友達の中で悩みを話せる友達の人数についてたずねたものである。全体をみると、「0人」が29.0%と最も多く、ついで「1人」の21.9%、「2人」の20.0%と続いており、「3人以上」の人は少ない。悩みを話せる友達というのは、親密な関係にあると考えられるが、子どもにとってそのような友達は少ないことがわかる。各群を比較すると、3人以上悩みを話せる友達がいると答えた者は、PM群やpM群では3割以上いるのに対し、Pm群やpm群では2割しかみられず、M機能の高い子どもは悩みを話せる友達が多くいるといえる。

表11 学校の友達（悩みを話す） (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0人	23.8	22.4	34.3	34.4	29.0
1人	21.6	23.9	22.5	21.2	21.8
2人	18.3	19.4	17.6	22.3	20.0
3～4人	20.9	21.6	15.7	13.8	17.6
5～9人	11.8	11.2	7.8	6.6	9.2
10人以上	3.6	1.5	2.1	1.7	2.4

P < 0.05

表12はよく遊ぶ友達の人数を聞いたものである。全体では、「5～9人」が35.5%と最も多く、次いで「3～4人」の28.8%、「10人以上」の13.8%と続いており、悩みを話す友達よりもその数は増加している。5人以上で遊んでいる子どもは約5割であるが、活動集団の基準である10人以上で遊んでいる子どもは1割強であり、子どもの遊びの数が減少しているといえる。各群を比較すると、5人以上で遊んでいる子どもは、PM群では61.1%、pM群では46.3%、Pm群では46.1%、pm群では40.9%であり、PM群が多人数で遊んでいるといえる。リーダーシップ能力の高いPM群は他の群よりも多人数で遊ぶことによってリーダーシップ能力を高めているのではないかと思われる。

表12 学校の友達（よく遊ぶ） (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0人	1.6	2.2	7.8	5.3	3.8
1人	2.0	8.2	3.9	8.0	5.5
2人	9.2	15.7	10.8	14.9	12.6
3～4人	26.1	27.6	31.4	30.9	28.8
5～9人	38.9	32.1	37.3	33.2	35.5
10人以上	22.2	14.2	8.8	7.7	13.8

P < 0.001

表13 学校の友達（話す程度） (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0人	10.1	10.4	7.8	10.6	10.1
1人	3.6	5.2	4.9	5.5	4.7
2人	9.2	9.7	6.9	11.2	9.8
3～4人	14.7	12.7	20.6	18.3	16.5
5～9人	26.5	23.9	29.4	27.8	26.9
10人以上	35.9	38.1	30.4	26.6	32.0

N. S.

表13は話す程度の友達の人数をあらわしたものである。全体をみると、「10人以上」は32.0%と最も多く、「5～9人」の26.9%、「3～4人」の16.5%と続いている。よく遊ぶ友達よりもその数は増えているが、問題は話す程度の友達がいない子どもが1割もいることであり、孤独感がうかがわれる。各群を比較すると、PM群、pM群、Pm群はあまり差はみられないが、pm群が低い値を示しており、リーダーシップ能力の低い子どもは学校での友達が少ないといえる。

(2) 同学年の近所の友達

表14は同学年の近所の友達の中で悩みを話せる人数をたずねたものである。全体をみると、「0人」が63.9%と最も多くなっている。次いで「1人」の21.2%、「2人」の8.4%と続いている。学校の友達に比べて悩みを話せる人が減っていることがわかる。各群を比較すると、あまり差はみられないが、M機能の高いPM群とpM群のほうが友達が多い傾向がみられる。

表14 同学年の近所の友達 (悩みを話す) (%)

項 目	PM	pM	Pm	pm	全 体
0人	58.5	58.2	69.6	69.1	63.9
1人	22.5	23.9	17.6	20.1	21.2
2人	9.8	11.9	7.8	6.0	8.4
3～4人	6.2	5.2	3.9	3.7	4.8
5～9人	1.6	0.8	1.1	1.1	1.2
10人以上	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5

N. S.

表15 同学年の近所の友達 (よく遊ぶ) (%)

項 目	PM	pM	Pm	pm	全 体
0人	31.4	39.5	42.2	43.2	38.5
1人	24.8	25.4	22.5	22.9	23.9
2人	20.3	14.2	10.8	18.1	17.4
3～4人	12.1	14.2	14.7	10.0	11.9
5～9人	8.8	6.7	5.9	4.9	6.6
10人以上	2.6	0.0	3.9	0.9	1.7

P < 0.05

表15はよく遊ぶ友達の人数を聞いたものである。全体では、悩みを話す人数に比べて「0人」が38.5%と少なくなっているが、それでも最も多く、「1人」の23.9%、「2人」の17.4%と続いている。また学校の友達では、よく遊ぶ子どもの数が3人以上と答えた子どもが7割を越えるのに対し、近所の友達では、2人以下が7割を越えることから、地域の遊び集団が減少していることがわかる。各群を比較すると、よく遊ぶ子どもがいないと答えた人は、PM群が約3

表16 同学年の近所の友達 (話す程度) (%)

項 目	PM	pM	Pm	pm	全 体
0人	39.2	37.3	45.1	49.8	43.8
1人	19.6	29.1	18.6	20.3	21.2
2人	16.3	12.7	11.8	15.2	14.8
3～4人	12.1	11.2	12.7	8.6	10.7
5～9人	8.5	6.7	5.9	5.2	6.6
10人以上	4.2	3.0	5.9	0.9	2.9

P < 0.05

割であるのに対し、pM群・Pm群・pm群は約4割であり、リーダーシップ能力の高い子は近所に遊ぶ子どもが多いといえる。

表16は話す程度の友達の人数をあらわしたものである。全体では、「0人」がよく遊ぶ子よりわずかながら増え、43.8%と多い。次いで「1人」の21.2%、「2人」の14.8%である。各群を比較すると、pm群が低い傾向がみられリーダーシップ能力の低い子は友達が少ないといえる。

(3) 異学年の近所の友達

表17は異学年の近所の友達の中で悩みを話せる人数をたずねたものである。全体をみると、「0人」が77.4%と圧倒的に多く、同学年の近所の友達に比べて悩みを話す人が少ないといえる。各群を比較してもあまり差はみられない。

表17 異学年の近所の友達 (悩みを話す) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0人	74.7	75.4	76.4	80.7	77.4
1人	10.1	11.2	10.8	9.2	10.0
2人	5.6	4.5	4.9	4.9	5.1
3~4人	6.9	3.7	6.9	2.6	4.7
5~9人	2.0	4.5	1.0	2.3	2.4
10人以上	0.7	0.7	0.0	0.3	0.4

N. S.

表18 異学年の近所の友達 (よく遊ぶ) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0人	42.1	51.5	47.1	49.6	47.0
1人	13.4	10.4	7.8	14.6	12.8
2人	11.8	10.4	12.7	12.0	11.8
3~4人	14.4	16.4	15.7	12.9	14.2
5~9人	15.0	9.0	12.7	9.2	11.6
10人以上	3.3	2.3	4.0	1.7	2.6

N. S.

表18はよく遊ぶ友達の人数を聞いたものである。全体では、「0人」が47.0%と5割の人がタテ関係で遊んでいない。また5人以上で遊んでいる子どもは14.2%であり、昔のようなタテ関係の遊び集団が無くなっていることがわかる。各群を比較すると、5人以上の人と遊んでいる子どもはPM群とPm群が多く、P機能の高い子どもは異学年の近所の友達と遊んでいるものと思われる。

表19は話す程度の友達の人数をあらわしたものである。全体では、よく遊ぶ子どもより「0

表19 異学年の近所の友達 (話す程度) (%)

項目	PM	pM	Pm	pm	全体
0人	41.1	36.5	42.1	47.0	42.8
1人	15.0	20.9	16.7	16.0	16.5
2人	9.5	11.2	10.8	14.0	11.7
3~4人	13.1	19.4	9.8	12.3	13.4
5~9人	14.4	9.0	9.8	9.2	11.0
10人以上	6.9	3.0	10.8	1.5	4.6

P < 0.01

人」が42.8%と少なくなっているが、それでもあまり変わらない。各群を比較すると、5人以上の話す程度の友達がいる割合はPm群とPM群が多い。このことはP機能の高い子どもはスポーツをしている子どもが多いいため違う学年の人と上手くやっけていけるのではあるまいか。

(4) 友達の関係

学校の友達、同学年の近所の友達、異学年の近所の友達の関係から子どもの仲間集団を分析すると、子どもは学校の友達を中心に仲間集団を作っており、近所にはあまり遊び友達がいないといえる。また異年齢の近所の友達が少なくなっており、地域において異年齢集団が形成されにくくなっている。今の子どもはリーダーシップ能力を地域の遊び集団を通して育むのではなく、学校における遊び集団を通して育てていく傾向がみられる。学校の同学年の中で育まれたリーダーシップは能力の高い子どもでも昔の地域の異年齢集団の中で育まれたリーダーシップに比べて弱くなっているものと思われる。

特に、悩みを話す友達については、PM群やpM群に多くなっており、M機能の高い子は、相談する友達も、相談を受ける友達も多い。このことから、今の子どものリーダーシップは、指導力の高いP機能よりも調整型のM機能が求められているといえる。仲間を支え、励ますようなM機能の高い子どもがリーダーになりうるものと思われる。

IV. 結 論

(1) 子どもの遊びの三つの間、時間・空間・仲間をみると、遊び時間は差はみられないが、リーダーシップ能力の高い子どもの方が、空間では休日の遊び場所として外遊びをよくし、仲間の遊び人数も多いといえる。

(2) リーダーシップ能力の高い子どもは、スポーツ・文化活動によく参加し、責任者の経験をよくしているといえる。また、自分の友達も責任者の経験をしている人が多い。

(3) 子どもは地域よりも学校の友達を中心に仲間集団をつくっており、異年齢集団が形成されにくい状況にあるといえる。また、学校の仲間集団でリーダーシップを取っている子どもは調整型のM機能を持つ子供が多いといえる。

最後に、昔の子どもに比べ、リーダーシップ能力の弱くなった子どもをみるにあたり、リーダーシップを育てる子どもの遊びをもう一度考える時期にきているのではあるまいか。リーダーシップ能力を持った子供を育てることが、体育の授業の改善や学級経営を良くする方法ではあるまいか。その意味からも子どもの手による遊びコミュニティを創造する必要があるといえよう。

参 考 文 献

- 1) 住田正樹著 「子どもの仲間集団と地域社会」 九州大学出版会 1985 pp.126-127
- 2) 山村賢明 「仲間集団と子どもの発達」 教育と医学 第34巻第7号 1986 p.10
- 3) 深谷昌志・深谷和子著 「遊びと勉強」 中公新書 1976 pp.79-80
- 4) 三隅二不二著 「新しいリーダーシップ」 ダイアモンド社 1966 p.117
- 5) 渡部治美 「子どもの遊びに関する研究」 愛媛大学教育学部保健体育卒業研究 1981